

千代田エクスワンエンジニアリング(横浜)が、BIMを成長戦略の柱に位置付けている。伊藤卓社長は「BIMを軸に社内人的資源の最適化を進めながら、グループ会社や国内外の設計協力会社とも密接に協業する体制をより強固にしていこう」と強調する。外部委託したコンサルティング会社から業務効率化の余地がまだ多く残されていると指摘されたことがBIM導入の出発点となった。BIMの新たなステージに踏み出した同社の目線はどこに向けられているか。道筋を追った。



同社は千代田化工建設のグループ会社3社が統合し、2023年4月に発足した。医薬品、食品、化粧品関連の工場や研究所を中心に建築プロジェクト領域を担うライフサイエンスプロジェクト(LSP)本部に移管した旧千代田テクノエースでは、08年からオートデスクのBIMソフト『Revit』を導入し、受注提案を足がかりに設計ツールとして活用する幅を着実に広げてきた。

ただ、21年に設計プロセスの現状分析を依頼した外部コンサルから、各部門がそれぞれ別の設計ツールを使いデータを変換しながら共有している流れが非効率な現状を生んでいることを指摘された。その解決策として示されたのがBIMの定着であった。建築、設備電気、生産設備の各ユニットからメンバーを選任したBIM推進タスクフォースを発足し、社長だった伊藤氏がリーダーとして陣頭指揮をとった。「本格的なBIM導入の動きはそこから始まった」と振り返る。

同社は、エンジニアリング会社



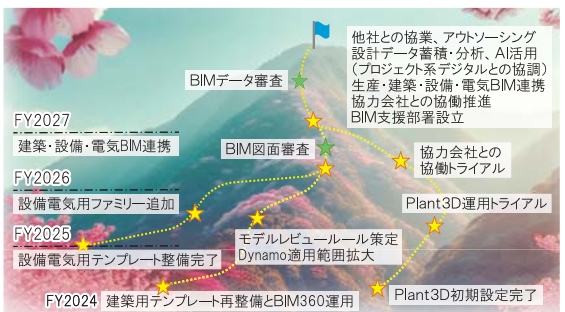
伊藤社長

外部コンサル指摘が出発点



建築、設備電気ユニットの調整会議

として石化プラントをはじめ、多様な産業施設のFS(事業化検討)、FED(基本設計)、EPC&M(設計・調達・建設・保守)を展開する。野田繁構造改革・デジタル推進担当は「各ユニットのデータをいかに効率的に統合管理できるかが求められている。LSP本部が先行するBIMの流れを確立し、それを全社展開することが、当社のDX(デジタルトランスフォーメーション)戦略の重点テーマになる」と強調する。



BIMロードマップ

医薬品、化粧品などの工場や研究所は建築だけでなく、空調、給排水、電気、生産設備、物流設備など多くの要素技術で構成されている。伊藤氏は「これらの要素技術をBIMによって統合することで、設計品質や業務効率化の側面で大きなメリットが出てくる。アウトソーシング先との協業作業でも同様だ。BIMは全体最適のツ

ールとして機能する」と確信している。

少子高齢化時代の到来で人材の確保が難しくなり、時間外労働の規制も動き出した。BIMは豊富な経験を持つベテラン社員の知識やノウハウをデータベース化する「技術継承の観点でも有効」と考えている。社内ではエンジニアリング(ENG)本部もBIMの活用に取り組み始めた。LSP本部が支援役となり、全社的なBIM推進を後押しする流れが色濃くなってきただけに「LSP本部内にBIM推進組織の発足も具体化していく」と先を見据えている。